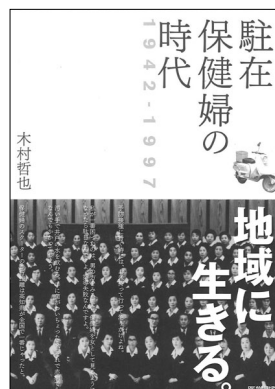


『駐在保健婦の時代 1942-1997』 駐在保健婦の語りから 学べることは多く、 学生のアイデンティティ 形成にも役立つ

著：木村哲也／定価：2,940 円(本体 2,800 円＋税 5%)
発行：医学書院／TEL：03-3817-5657



本書は、保健婦を国家と国民のはざまに立つ存在として注目し、彼女らがどのような技術・意思・態度で駐在活動に臨んだのかについて、歴史学の方法を用い、膨大な資料に加え「聞き書き」によって、その実態を浮かび上がらせたものである。

若き歴史民俗学者がこのテーマを探究した背景には、高知県で駐在保健婦をしていた祖母の存在がある。またそれが、30 数名の元駐在保健婦からの聞き書きを可能にしている。著者は、1994 年度提出の卒業論文以降、修士論文、博士論文に渡り 10 年以上このテーマに取り組んできた。1997 年の地域保健法によって駐在制は全面廃止されたが、著者が歴史に実在した駐在保健婦の生きざまを、本書によって世に送り出してくれたことに、これからの保健師教育を担う者として心から敬意を表したい。

本書のあとがきには、2011.3.11. の東日本大震災後に、大槌町に全国の保健師が集結し全戸家庭訪問を実現した例をあげ、保健師の原点回帰志向が強まっているようだと言われている。私が所属する一般社団法人全国保健師教育機関協議会(以下、全保教)が中心となって展開した活動を、木村氏が知ってくれたことに感激するとともに、保健師仲間全員で、本書に書かれたことの意味をかみしめたいと思った。そこにニーズがあれば制度などなくても応じる気概、いつも地域に密

着して住民の立場からもの申していくたくましさ。私たちが駐在保健婦の語りから学べることは多く、保健師課程における学生のアイデンティティ形成にも役立つ教材になると考える。

また、今回歴史民族学者が史実を明らかにする際の表現の仕方に初めてふれ、年月日と情報の出所を明確に示して、事実関係の解釈を述べていくことで、ナラティブでありながら客観性をもつ深みのある力強さに感動した。研究者としては、このような表現が、公衆衛生看護学における地域アセスメントや、住民と関係者の協働の過程の記述方法にも応用できるのではないかと思った。

蛇足であるが、今年、全保教の山口県での秋季研修会で「宮本常一のフィールドワークに学ぶ」と題して周防大島文化交流センターの高木泰伸学芸員にご講演いただいた。ご挨拶した折り、この本の話をする、ちょうど今日購入したところと手元に持っておられた。なんと木村氏は彼の前任の学芸員だったという。著者が保健師に着眼したように、私たちが民俗学者から学ぼうとしていたことに、ベースとなる人間観・地域観のふしぎな共通性を感じ、温かな気持ちになった。

ぜひ、教員の皆様にもご一読いただきたい。